

2010.4.15 / Vol.29

1880年代教育史研究会 ニュースレター

第29号

目次

[連載]

- 神辺 靖光 「学校をめぐる逸話と風景（3）
共立学校と高橋是清」…………… 2

[個人研究]

- 富岡 勝 「木下広次についての木下正雄・道雄の回想」…………… 3
鄭 賢珠 「文部省直轄学校関係者の欧州留学・派遣（2）」…………… 5

[研究会便り]

- 富岡 勝 「東京大会（2月27日）報告」…………… 7

[研究報告]

- 田中 智子 「諸学校令体制下における高等教育体制の再編
—仙台における文部省・県・キリスト教勢力の競合—」 9

[紹介]

- 谷本 宗生 「長谷川時雨『旧聞日本橋』（1935年初版、1971年復刻）
の一節 —明治初めの動向—」…………… 11

- [お知らせ]…………… 12

[連載] 学校をめぐる逸話と風景 (3)

共立学校と高橋是清

神 辺 靖 光

NHK のテレビドラマ“坂の上の雲”で、主人公の秋山真之と正岡子規が東京神田の共立学校に入って英語を学ぶシーンがあった。高橋是清が教師で教えている。1936年にでた『高橋是清自伝』では次のような話になっている。

明治11年の頃、高橋は東京大学予備門の教師をしていたが、下宿先の矛野という老人から、今、隣の大きな建物が空き屋になっている、この土地は明治のはじめにわれわれが、払い下げを受け、学校をたてた。一時は盛んだったが、さびれてしまった。ひとつ、この学校をたてなおしてくれまいか、と頼まれた。自分は大学予備門の入学生の学力が低いと感じていたので、入学する前に学力をつける学校にしようと思い、大学予備門の同僚である鈴木知雄と森春吉に相談したら二人とも代替成で、この共立学校を復活再興することになった。矛野老人が250円かけて25坪の新校舎を建ててくれた。そこで古い教室の二階を寄宿舍とし、下は教室と事務室にあて、開校することになった。意外に志望者が多く、予備門の試験で、共立学校出身者が一番及第者が多いと言うので評判が一層よくなった。予備門の同僚が大勢教えにきてくれるのでますます繁盛した。

それはそうだろう。入学志望先の学校の先生がきて合格レベルの英語を教えてくれる。受験生にとって、こんなに有難いことはない。東大教授が東大進学をめざす予備校の教師を兼任するような

ものである。こんなことが許されたのか。実はこのような例は沢山あった。あとで述べよう。

そもそも、高橋が引き受ける前の共立学校が始まるいきさつを述べねばならないが、その前に、高橋の経歴をみておこう。高橋是清と言えば1921年、総理大臣、27年以後、大蔵大臣を幾度かやり、昭和恐慌に対処した財政家で、36年、2・26事件で反乱軍の凶弾に仆れた人物として知られている。しかしここでは彼の数奇な少年、青年期の遍歴と1870年代の文部官僚としての彼の活躍を略述しよう。

高橋は安政元(1854)年、江戸で生まれた。仙台藩士の家である。12歳、前出の鈴木知雄と一緒に横浜にでて、ヘボン夫人から英語を習った。14歳の時、鈴木とともに仙台藩の藩費留学生となってアメリカに渡ったが、サンフランシスコで、悪者にはかられ奴隷に売られた。艱難の末、漸く脱出して1868年、帰国した。とり持つ者があって、外国官権判事・森有礼の書生になり、そこで森から英語を学んだ。69年、大学南校に入学したが、英語がよくできると言うので教官三等手伝いになった。70年11月、南校教官のダラスとリングが神田須田町を日本人の妾と手をつないで歩いていたら、壮士に切られるという事件があった。この時、急を聞いて高橋が駆けつけ、介抱している。この頃、森が弁務使として渡米した。森は高橋を南校教師のフルベッキ邸に寄寓した。やがて

彼は日本橋の芸者・榊吉と馴榊になり、夫婦になるつもりで、その置屋に住み込み、箱屋のような仕事をした。また吉原でも遊興したが、ある時、遊女にこんこんとたしなめられ、放蕩から立ち直ろうと決心する。丁度その時、肥前唐津藩が英語学校をたてることになり、高橋に教師になるよう依頼があった。高橋は海路、唐津に行き、英語学校を開校した。次いで外国人教師を雇うことになり、東京に戻ってフルベッキに相談中、廃藩置県で、唐津藩と伊萬里県の争いが起った。急拠、唐津に行き、英語学校の始末をしてからまた東京に戻った。72年、大蔵省に入って外国郵便規則の翻

訳に従事し、また外国人教師に頼まれて、日本の新聞を英訳したり、東海道中膝栗毛などを英訳した。さらに外国の新聞を邦訳し、それを日本の新聞社に売ることを企て、高橋の訳を末松謙澄が日本文に書き直して大いに儲けた。その頃は司法大輔・佐々木高行の家に下宿して佐々木家の家人に英語を教えていた。上司と喧嘩して大蔵省を止めた高橋は73年、開成学校に入学したが、森有礼が帰国し、文部省学監ダビドマレーの通訳をやれと高橋に命じた。そこで高橋は文部省出仕となる(以下次号)。

[個人研究]

木下広次についての木下正雄・道雄の回想

富岡 勝

2月の東京大会では、研究年報第2号の執筆構想として、一高寄宿舎自治制開始についての論文の続編について報告したが、木下広次校長の役割についての評価は難しい。従来の研究では、木下校長の主導によって寄宿舎自治制度が導入されたように描かれることが多かったが、当時の生徒の証言などによると、生徒たちと幹事の松田為吉との間で寄宿舎についてのやりとりが続く中で、舎監による取締りに代わって「自治」という案が生れ、それを木下が認めたという流れであったようだ。しかし、だからといって木下の役割をすべて否定すればよい訳でもないだろう。木下の学校運営に対する基本的なスタンスや、森有礼の教育方針との関係、三高の折田彦市などとの比較など、考えるべきことは多い。

木下広次の役割について考えるとき、回想も参考になるだろう。旧制高等学校記念館で『一高同窓会会報』をめくっていたら、1936年ごろの第30号(すみません、発行年月日を控えてくるのを忘れたので次号に追加します)に広次の息子である木下正雄と道雄による回顧談が掲載されていた。管見では従来の研究では、ほとんどとりあげられていないが、貴重な証言だと思われるので、その一部を紹介してみたい(< >の見出しと〔〕内注釈は富岡。踊り字は仮名に直した)。

<自宅で生徒と雑談>

「父には此の一高時代の生活が一生の内が一番愉快だった様です。校長になつてからあの寮の建設

問題が起り、赤沼金三郎氏、山口英之介氏等が良く家に来られました。赤沼氏は父の信頼が特に有った様で、いつも藁草履に太い桜の杖と云ふ恐しい格好で来られたのを憶えています。併し之もどう云ふ譯か知りませんが止めて、文部省専門学務局長になり、更に転任して京都帝大の初代の総長となつたのです」

「父は若い者が好きで、良く心が融合するらしく、又話題にも富んでいたみたいです。一高の校長時代にも、京大の総長の時にも学生が実に好く来ました。父は極くくだけた態度で、如何にも笑ひに富んだ雑談をしたらしく、いつも煙草盆を枕にして話してみたのを記憶して居ます」

<息子の教育に無干渉>

「家庭に於ける父は叱言一つ言はない人でした。『無干渉は大なる干渉である』と云ふのが父の主張です。で私達の学校の方針にも決して干渉はしませんでした。私の記憶してゐる所では、唯一回京都にみた時、父は大学、私は中学へと毎日同じ道を通つてゐましたが、或る日途中で会つて挨拶が良い加減だつたと注意されたことが有るだけです。勿論放つて置くと云ふのではないのです。遠くから実に色々と心配はしてゐました」

<四書五経の倫理観と西洋式習慣>

「酒は全然やりませんでした。まあ疲れた時一寸ブランデーを飲む位でせう。又ヨーロッパに永くみた為か、其の習慣で朝はコーヒー、チーズ、パ

ンなどの食事を取りました。一体父の考は新しくも有り、古くも有りと言ふ処です。処世術は漢学の家に生まれただけに四書五経に則り、此の中に在る士と云ふ言を常にモットーとしてゐました。常に「卑怯な事をするな」「損得を云ふな」「金のことをグツグツ云ふな」と云ふのを口癖にしてゐました。根本をこんな考へに置いて、其の上留学中色々新しい西洋の良風を得た譯なのです。一高の自治と云ふことなども留学中フランスの共和自治のことが頭にしみこんだ為だらうと思ひます。又高等学校の教授の着るあの黒いガウンの様なのは父が久原さん〔広次が一高校長のとき、教頭をしていた久原躬弦のことと思われる〕と相談して決めたものです。衣冠を正しくすると云ふ点に於いて非常に結構ですね」

<勝気で活動的>

「それから父は仲々勝気の性質で、一高の校長時代胸を傷めてゐましたが、それを頑張つて血を吐きながら生徒と一緒に路を歩いたこともある位です。又或る時車に乗つて老人が若い者にいぢめられてゐるのを見て憤慨に堪えず、車から飛び下りて其の若者をなぐつたそうです。驚いたのは若者だけでなく車屋さんでせう。父を刑事だと思つたらしく、車賃の高かつたことを急に詫びだしたと云ふ滑稽な話があります」

「いつも羊羹色の洋服を破れてゐるのも構はず着てました。又旅行に行つて、あんまり風采を構つてなかつた為か、所謂行燈部屋に入れられ、翌日其処の知事が会ひに来て宿屋で慌てゝ部屋を替へた

と云ふ笑話も有ります。併しそんな事には一向頓着なく、宿帳には良く小学校教員などと書いてゐました」

<歴史・武術・狩猟>

「趣味は第一に歴史です。特に晩年は日本歴史に興味を持ち、人から外国に行きたくないかと聞かれても行きたくないと答へた程ですから、日本には余程愛着を感じてた様です。一方今で云ふスポーツも若い時から色々やつてみた様です。棒高跳びをして家の廂に跳び登つた話も有り。其他京都の武徳殿で二刀流をやり、水泳も相当で立泳ぎをし乍ら釣をしてゐたことも有ります。父は何分勝気の性質ですから、今から考へれば随分乱暴な事

もしました。当時伝通院〔自宅所在地〕の近辺は草林茂り、野犬が多かつたので、大きな長刀を振り廻して、之等の犬を切つて追ひ払つたことも有ります。それから猟が好きで私達は犬の代りによく追ひ使はれたものです。東京では戸田原、京都では鹿谷の附近で盛にやりました」

あくまでも回顧談であり、主観も含まれているが、専門学務局長や帝大総長を務めた「教育行政家」としての側面が目立つ木下だが、体を動かすことや生徒と談話するのを好む「教育者」の資質を持っていたことも推測される。こうしたことも頭の隅に入れながら、史料に基づいて分析を進めていきたいと思う。

[個人研究]

文部省直轄学校関係者の欧州留学・派遣（2）

鄭 賢 珠

ニューズレター27号で1888年の第一高等中学校教諭村岡範為馳の欧州派遣について述べた。しかし、村岡の欧州派遣は、二年の年月がかかっていたにもかかわらず、その内容はもちろん、帰国後の村岡の活動との関係をも明らかにされていない。ただ、村岡は、「この時、運よくヘルツの電子波の発生実験に遭遇している。当時東大の大学院生だった長岡半太郎はドイツ滞在中の村岡からの報告を受けてヘルツの実験の追試を行っている」としており、1891年論文提出によって、理学博士の称号をうけた日本で初めての理学博士であった。村岡の次に論文提出によって物理学の博士号を得たのは、1893年の長岡であ

ったということが指摘されている。この村岡の成果は、本来の派遣目的である「高等中学校教務取調」とは異なり、付随的な産物とみなすべきか、それとも、当時の派遣目的は内容を伴わない名目的なものと評価すべきかについては、史料発掘やさらなる検討が必要であろう。

村岡は、文部省出仕、東京女子師範学校教諭の1878年に最初の留学を経験し、その経験は音楽取調掛への任命に影響をあたえたとされている。上原和也は次のように纏めている。

「ドイツでの生活で、その地方の民族音楽や古典音楽が家庭のなかに生かされ、学校教育にも浸透し

ているという経験をもった村岡は、日本には音楽学校すらない現状を憂え、帰国後、仲間とともに音楽学校設立の運動を行った。その甲斐もあってか明治20年（1887）に文部省の中にあった音楽取調掛が独立昇格して、上野に東京音楽学校が設立された。初代の校長はアメリカ留学経験をもち、音楽取調掛の中樞にいた伊沢修二だった。伊沢の後任となった村岡は、明治24年（1891）に自ら祝祭日唱歌審査委員長となって国歌「君が代」の制定に関与した」（「村岡範為馳のこと—日本人として初めて外国誌に論文が掲載された物理学者」『大学の物理教育』3号、2000年）。この村岡の留学とその後の官僚としての活動が直接に関連しているかどうかは不明であるものの、留学時の書簡や意見書の発掘によって、立体的に官僚活動や人事への影響をも明らかにすることができると思われる。

直轄学校関係者の目的が明記された派遣は他にもある。村岡の派遣から半年後の1889年2月、高等商業学校教頭の成瀬隆蔵も商業教育関係の調査を目的に派遣が協議されている。

「高等商業学校教頭成瀬隆蔵

商業教育ハ国家富強ノ基礎ニシテ其施設ハ實ニ方今ノ急務ナレハ能ク其方法ヲ整治シ完全ノ成績ヲ期セサルヘカラス。然ルニ該教育ノ事タル尚幼稚ニ属スルヲ以テ教務上等ニ関シ調査ヲ要スル事項少カラス、就テハ従来該教育ニ従事スル者ノ中、適当ノ者一名ヲ選択シ、欧米諸国ニ派遣シ、実地

ニ就キ彼国商業教育ニ関スル諸件夫々調査セシムルコト必要ノ儀ニ有之候、因テ右調査ノ為メ前記成瀬隆蔵ヲ往返ヲ除キ、凡一ヶ年半欧米諸国へ派遣命セラレ度、且其費用ノ儀ハ当省経費ノ都合モ有之、成規ノ旅費金額支給難致ニ付、往返旅費ハ成規ニ依テ支給シ其他彼地在留及巡回中一切ノ費用ニ充ツル為メ此際金貳千円来年度ニ於テ金貳千円合金四千元ヲ手当トシテ支給致度、尤諸学校ノ款中当該科目ニ於テ金額支出ノ目途無之候ニ付種々計画ノ上、別紙費途概算調書ノ通、彼是流用支弁致度、別紙調書相添此段請閣議候也

明治廿二年二月廿三日 文部大臣伯爵大山巖
内閣総理大臣伯爵黒田清隆殿

（公文書館所蔵『官吏進退』任A00205100）

この派遣は、期間は1年半を予想していたが、問題は費用にあったようだ。この文章でも指摘しているように、成規の旅費金額の支給が難しいため、21、22、23年度の経費のなかで流用して、4千円の手当を用意する抜け道を考えていたようで、その後、閣議の決定をへて、大蔵省と会計検査院にもこの事項が通牒されていた。外国旅費支給に関する現実的な調整の様子が窺える。

文部省の学校政策という観点からすると、教員養成のための留学形式や政策視察とも性格が異なるこのような派遣（ある意味では留学）は費用を伴うという側面からも当時の緊急問題、課題に対する文部省側の認識を考察できるよい材料であろう。

[研究会便り]

東京大会（2月27日）報告

富岡 勝

2010年2月27日に、前回に引き続き神辺顧問邸で研究会を開催した。今回の目的は、研究年報第2号の執筆構想と来年度の研究会の活動方針などについて話し合うことであった。出席者は、荒井代表・神辺顧問・田中・谷本・富岡の5名であり、参加人数は少なかったが充実した内容であった。進行役は、田中会員がつとめ、記録は富岡が担当した。欠席会員へのレジュメ送付は谷本会員を中心に数名で行った。

最初の報告は、荒井代表による研究年報執筆構想であった。「先行研究の検証 先行研究の八十年代像」を第一の目標とし、「地域との関係」「尋常中学校と高等中学校とのアーティキュレーションの問題」にも取り組んでいきたいという構想であった。また、地域との関係やアーティキュレーションについては、基礎史料集にも収録すればよかったという感想も示された。会員からは、アーティキュレーションなどの実態に迫るには「史料の豊富な県、拠点となりそうな尋常中学校などに注目して年報などを含めた史料を探すのがよい」などの意見が出された。

次に神辺顧問より執筆構想の報告があった。第1号では1880年代の中学校をその性格の変遷から考察したのに続き、第2号では「教育内容と方法の形成」について、とても400字詰め50枚では収まらないが、まとめていきたいということであった。80年代の中学校教則大綱や教則など。1870年代の中学校では口述やテキストの筆写が中心であったが、1880年代にテキストが文部省でつくられ始め、さらに尋常中学校と高等中

学校のテキストをつきあわせて「これでいける」というようになっていったのではないかと、という過程をいくつかの中学校の具体例を紹介しながら考察していきたいということであった。また、どういった人物が中学校の教師になっていたか、校長はどこから来たのか、についても追いかけていきたいという抱負も述べられた。

昼食は神辺顧問のご配慮で近所で開店した蕎麦屋さんで美味しい蕎麦をいただき感謝。

午後最初の報告は、田中会員による「諸学校令体制下における高等教育体制の再編 仙台における文部省・県・キリスト教勢力の競合」と題した研究報告であった。森文政期における「官立」「公立」「私立」の三者の交錯状況を仙台を素材に考察し、仙台を諸学校令体制の新しさ（高等教育の主体としての国一県一民間の境界を流動化させ、活性化を促した体制）をよく反映した県として特徴づけた。この研究テーマから派生した話題を研究年報第2号に何らかのかたちで書いてみたいとのことであった。

意見交換では、設立運動関係の史料は必ず基礎史料集に載せる必要が改めて確認された（史料集の二高担当の富岡は反省しております）。報告で示された各高等中学校の設置形態、設置費用準備方法、府県知事・キーパーソンなどをまとめた一覧表に関して、「これをきちんと考察するだけでも面白い」という意見も出た。また、四高など他の高等中学校の設立運動趣意書を改めて見直す必要性も確認された。また「教育内容不完全と議員が言っているとき、何をもって不完全と見て

いたのか、何を完全と思っていたのか、掘り下げて考える必要がある」といった意見など、田中報告に触発されて更に具体的な実態解明を進めていこうという機運が高まった。

続いて谷本会員の研究年報執筆構想が報告された。上田英吉の「遊学日記」の紹介を第1号に引き続いて行うということで、予備校である東京英語学校から1889年9月第一高等中学校入学、帝国大学医学部進学といったあたりの時期の生活実態を紹介してもらえそうである。上田英吉は卒業直後に病気で死去してしまったそうであるが、早すぎた死が惜まれる。また金沢の四高について話題提供もあった。石川県専門学校の教員であった人物の自伝を読むと、第四高等中学校設立趣意書の前史がありそうなので、今後調べていきたいとのことであった。また、基礎史料集では一高の教員リストを掲載したが、教員の履歴をまとめると色々発見があるのではないかと谷本会員は指摘した。これに関連して、各人物の自伝をストックしておこうという提案があった。ぜひ研究会として取り組んでいきたい。

本日五番目の報告として、富岡が執筆構想を報告した。第1号では「第一高等中学校寄宿舎自治制導入過程の再検討」を前史として、木下広次赴任以前の時期について考察したが、第2号ではいよいよ木下赴任後に寄宿舎自治制導入の具体的経過を分析していく。木下校長だけでなく、最近の研究でも指摘されはじめている幹事松井為常や生徒達の役割を史料に基づいて明らかにしていきたいと考えているが、従来の木下広次像とやや異なることになるかもしれない。これに関連して「森有礼死後、教育勅語発布へと向かう状況のな

かで木下の取り組みをどのように位置づけるか」「森死後の地方官会議で噴出した師範学校批判の中身はどういったものであったのか踏まえておく必要がある」「木下の德育観は森や井上毅と比較してどうか」など重要なヒントもいただくことができた。

最後に、2010年度の科研費が採択された際、会員でどのような研究分担をして進めていくか、少し協議が行われた。「アーティキュレーション」「教員とカリキュラム」「地域と有力者」などのテーマごとに数名ずつ担当を決めて調査や分析に取り組んでどうか、という意見も出され、参加者が同意した。

その場で次のような分担の試案も提案された。

「アーティキュレーション」

……荒井、小宮山、佐喜本、三木

「教員とカリキュラム」

……鄭、富岡

「地域と有力者」

……田中、谷本

全体にわたる助言

……神辺、福井

この試案をたたき台の一つとして次回研究会でさらに協議していくこととなった。

今回の研究会によって、研究年報第2号の構想が具体化し始め、2010年度の活動の展望がだいぶ見えてきたように思われる。

研究会終了後、高円寺駅近くの寿司屋で希望者で神辺顧問を囲んで歓談することができた。次回も前日または終了後にこのような懇親会も実現していきたい。

以上

[研究報告]

諸学校令体制下における高等教育体制の再編 ——仙台における文部省・県・キリスト教勢力の競合——

田中 智子

本報告は、森文政期における「官立」「公立」「私立」の動態的關係を考えるものである。素材は仙台に求めた。

まず前史として、仙台における近代高等教育揺籃期の特徴を押さえておく。1873年8月、官立宮城師範学校が設置された。校長は大槻文彦で、東京師範学校の成規に準拠し、教員もその卒業生であった。各地の官立師範学校同様、1878年2月には廃止され、県の仙台師範学校がこれを引き継いだ。また、官立外国語学校も1874年3月に設置された。この年12月に英語学校と改称されるが、他の官立英語学校同様廃校となり、県に移管され、1877年2月、仙台中学校（1879年6月県立宮城中学校と改称）が創設される。このように、仙台高等教育の特徴は、官立学校が県立学校化したことにある。

1885年3月、県会は宮城中学校の英語教育充実のために中学校費の増額を動議し、可決された。教育費削減要求が恒常化している大半の府県会と比べると、めずらしい動きである。同校は官立英語学校であった前歴ゆえに、英語を重視していたことにもよるだろう。また、「大学予備門に入るの階梯」と位置づけられ、在京の仙台造士義会の活動にもみえるように、東京志向の強い土地柄もうかがわれる。

1886年10月、「高等中学校位置ノ趣意書」が作成され、寄付金が募られた。金沢の趣意書と異なり、県教育の代替とするとの意図、あるいは旧藩以来の教育の伝統などへの言及はない。また、第二区（東北）の区割りおよびその中心であることは確定的であって、金沢のような事前の文部官僚による下見や誘致的活動もみられない。創設にあたっては、他と同様、10万円の地元負担が条件とされていたが、地方税からの支弁ではなく、義捐金による支弁という方法が採られたので、設置に際して県会がからんでくることはなかった。その義捐金は、すそ野の広さを特徴とし、郡部も含めた広範囲からの小口支出によってまかなわれ、森有礼も高く評価するところであった。ただし、必ずしも計画通りに集金できたわけではない。旧藩主の寄付金は5000円で、金沢や熊本と比べ少額である。設置は1887年4月に告示され、9月より授業が開始される。

一方、同じ1886年10月に開校したのが宮城英学校である。地元寄付金で運営されたが、同志社の新島襄を校長とし、同卒業生やデフォレストら宣教師を雇用、聖書教育も黙認された「同志社分校」でもあった。発起人の日銀副総裁・仙台造士義会初代会長の富田鉄之

助はアメリカ留学体験をもち、新島と森有礼文相、松平正直県知事を結びつける役割を果たす。同じく発起人の松倉恂仙台区長は、学校用地を提供し、大槻文彦が設立趣意書を起草した。商議会には知事のほか、県吏和達孚嘉や七十七銀行の遠藤敬止が加わっていた。要するにこの学校は、県当局や県下有力者とキリスト教勢力による「半県半民」的学校であり、1887年6月に東華学校と改称、普通科5年、高等科2年のカリキュラムを備える。

翌1887年11月、宮城県会は中学校費を削除した。高等中学校別科と東華学校が代替となるとの説明であり、同じく廃止された医学校費とともに、高等中学校の運営経費負担分に充当された。廃止された医学校や中学校の地所建物、中学校の書籍器械器具は文部省に寄付された。これらの寄付を、高等中学校設置費用負担10万円の一部と数えた点も、金沢とは異なっている。

1888年11月、県会では早速中学校の再興が決議された。これは不採択となるが、1891年12月、県中学校一校の設置を義務付ける改正中学校令公布と時を同じくして予算が修正計上された。翌年6月、大槻文彦校長の下に中学校は再発足する。一方、東華学校は宗教教育に関する商議委員と宣教師の対立もあり、1892年3月廃校となった。「半県半民」学校

の終焉といえるが、その校舎書籍器具は再興した県中学校に引き継がれる。

宮城県は、「高等教育の主体としての国一県一民間の境界を流動化させ、活性化を促す」という森文政（諸学校令体制）の新しさをよく体现した県であったといえるだろう。府県との連携という伝道戦略をもつアメリカンボードの到来が京阪神一帯より遅く、1880年代後半に「半県半民」学校が実現した。それは、第二高等中学校が設置されるのと同時であった。「官立」「私立」の誕生を背景に、「県立」は一時廃止される。森文政期における府県会の中学校費削除は他にもみられた現象で、濟々覺にその代役を務めさせた熊本、経費のみ大谷派本願寺に委ねた京都（いずれも高等中学校設置地でもある）との比較が可能である。地域での拠点性が揺るがず、官立学校所在地であり続けた点は、仙台の特性であり、県中学校もその改組校であったからこそ、高等中学校への引き継ぎもスムーズであったといえる。旧藩主の役割の小ささ、地元出身有力者の役割の大きさなども特徴であろう。県中学校・東華学校・第二高等中学校三者の関係について、カリキュラムのレベル比較や教員の流動性など、検討課題は残るが、後日に委ねたい。

[紹介]

長谷川時雨『旧聞日本橋』（1935年初版、1971年復刻）の一節 — 明治初めの動向 —

谷本 宗生

谷本は、金沢や松本など地方都市へ出かけた際にできるだけ時間をみつけて、古本市や古書店を覗くことをたのしみにしている。神辺靖光顧問は、驚くことに全国各地の図書館や文書資料室などを行脚したと聞く。神辺顧問などの研究者に対抗することは毛頭できないが、筆者自身の研究調査とは別に、各地の古本市や古書店を散策して古書を入手することは、余暇以上に結果として歴史意識を深めることに繋がっているのではないかと想像する。3月中旬、松本の旧制高等学校記念館を夏期セミナー開催の打合せで訪れた際に、近くにあった古書店・松信堂書店（松本市中央3丁目）をちょっと覗いてみた。松信堂書店を初めて訪れたら、ビッシリ古書群がほとんど歩くスペースもなく聳えている様にきっと圧倒されるだろう。店主は思いの外気さくで、いくつか自伝や回顧録（小林勇編『回想の寺田寅彦』1937年、安倍能成『岩波茂雄伝』1957年、宮本又次『先学追慕』1982年など）を購入したら金額を勉強してくれる嬉しかった。

そこで購入した文献の1つ、長谷川時雨『旧聞日本橋』（1971年、青蛙房）の挿絵を、今回のニュースで紹介してみたいと思う。作家・婦人運動家として知られる長谷川時雨（1879～1941年）の『旧聞日本橋』は、日本橋で生まれた長谷川の成長過程で見聞きした物語である。同上書の挿絵について、長谷川は「天保十四年に生まれた故父溪石深造が六歳の

ころから明治四年までの見聞を『実見画録』として百五十図書き残しておいてくれましたなかから、すこしばかり選び入れました」（13頁）と述べている。明治初めの動向を示す興味深い挿絵のなかから、とくに「明治初年頃道路の謡と古道具の見世」の一節（文章）を、以下引用したい。

「明治初年頃は幕府の末路 扶持に離れ知行にはなれし者にして生活に苦しみし者数多ありし事は皆人の知る処なるも 甚敷は道路に出て謡をうたひ錢を乞ふ士族もありし 爰に掲しは神田明神下にて人品よき士族躰の男道路にむしろをしき謡をうたふて錢を乞ふ 其面前に是も士族躰の男一人来り 知己の有無は知らざれども脇となりて景清をうたふ処を見聞せり 此頃は総ての遊芸すたりしも就中謡の如きは地に落たりといふも可なり 明治十一年の頃迄は人に知られたる此道の先生方もなかなか困難なりし様に思はれたり 此頃は古道具の夜見世杯にて金銀の高蒔絵を為せし器物其他 今日に在ては見るを得ざりし貴重品をむぞうさにむしろの上にならべ其価も安く相場もなく是等は一時金に換へたしと多くの士族の家より出しもの 甚敷は祖先伝来の器物を何等の鑑しきもなき者へ云はば附直にて売却し是を買取し者も其物品の何たるを問はず 金まき絵の類は其箔を落してつぶしとなして平然たり」（100～101頁）

同じころ、今泉みね（1855～1937年）『名ごりの

夢 蘭医桂川家に生れて』(1940年初版、1963年復刻)や山川菊栄(1890~1980年)『おんな二代の記』(1956年初版、1972年復刻)などの古書を偶然読んだが、幕末から明治初期の動向が赤裸々に回顧・証言されていた。長谷川の同上書にしても今泉本にしても山川本にしても、最初から計画的に読書したわけでないが、明治初めの動向を理解するうえできわめて有効な文献となった。人との出会いにタイミング

があるように、本についても(新刊・古書を含めて)、なにか谷本自身の意図や思惑をこえた力学がそこに働いているのではないだろうか。先日も、長谷川溪石『実見画録』の一部を後に限定復刻した『江戸と東京 実見画録』(1968年、有光書房)を、古書店のサイトから安価に入手することができた。入手した古書の内容については、今後も紹介していきたいと思う。



[お知らせ]

・ニューズレター30号の締切日は、2010年6月30日(水曜日)です。よろしくお願ひいたします。

「1880年代教育史研究会」ニューズレター 第29号 2010年4月15日発行	
<研究会連絡先> 富岡勝 「1880年代教育史研究会」事務局 〒577-8502 東大阪市小若江3-4-1 近畿大学教職教育部 富岡勝研究室気付 E-mail: tomiokamasa@kindai.ac.jp	
<HP> http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/1880/	
<原稿送付先> 鄭賢珠 〒606-8172 京都市左京区一乗寺河原田町37-1-413 E-mail: hyunjung4@hotmail.com	